

# 概要版

---

## 第1章 背景・目的等

- ・ 少子高齢化・人口減少が進む中、まちづくりの担い手確保は重要な課題であり、将来世代である若者の参画は持続的なまちづくりに不可欠である。一方で、若者が政策形成に十分参画できていない現状がある。
- ・ 若者が早期からまちづくりに関わることは、当事者意識や地域への愛着・誇りを育み、将来にわたって継続的に関与する基盤となる。また、若者の新たな視点を施策に反映することで、政策の実効性や受容性の向上、持続可能な自治体運営にも寄与する。
- ・ 本調査研究では、全国の先進事例を踏まえ、若者のまちづくり参画を促進する自治体の取組の方向性を整理し、多摩・島しょ地域の政策や将来のまちづくりに資する提案を行う。

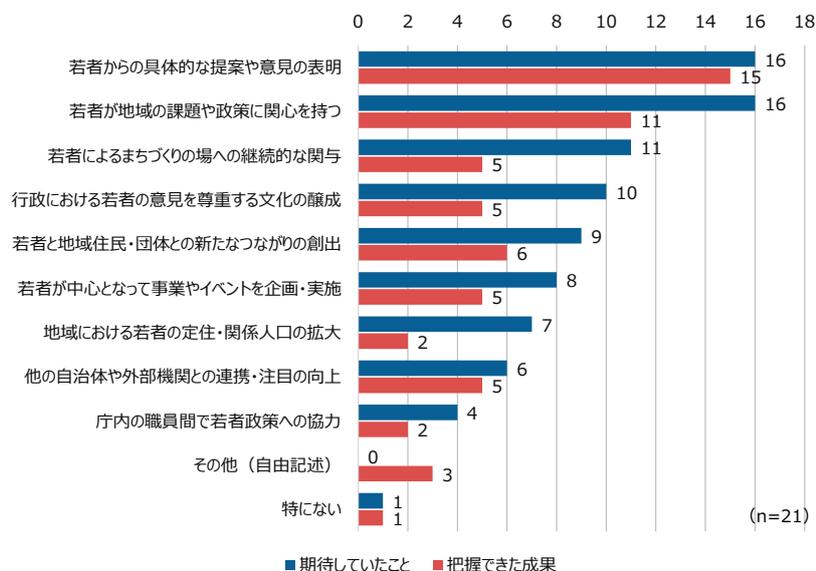
## 第2章 概論

- ・ 自治体の中には、若者をまちづくりにおいて重要な役割を担う層として、条例を制定しているところも少なくない。
- ・ 既存調査によれば、若者は、社会に貢献したいという意向が高い一方、実際に社会貢献活動を行っている割合は低く、意向と行動の間に一定のギャップが存在している。
- ・ 若者は、ボランティア活動の分野として、「子ども・青少年育成」、「まちづくり・まちおこし」へ関心が高く、参加理由としては、「社会の役に立ちたい」、「自己啓発や自らの成長につながる」の割合が高かった。
- ・ 本調査研究では、まちづくりに主体的に関わる世代として、おおむね15～39歳（高校生以上）を「若者」の主要な対象年齢として設定した。
- ・ 加えて、「まちづくりへの参画」を、「一定の主体性を持ち、さまざまな形で地域に関わっていく取組を指すもの」と定義して進めていくこととする。

## 第3章 多摩・島しょ地域における現状把握

### □自治体アンケート調査から分かったこと

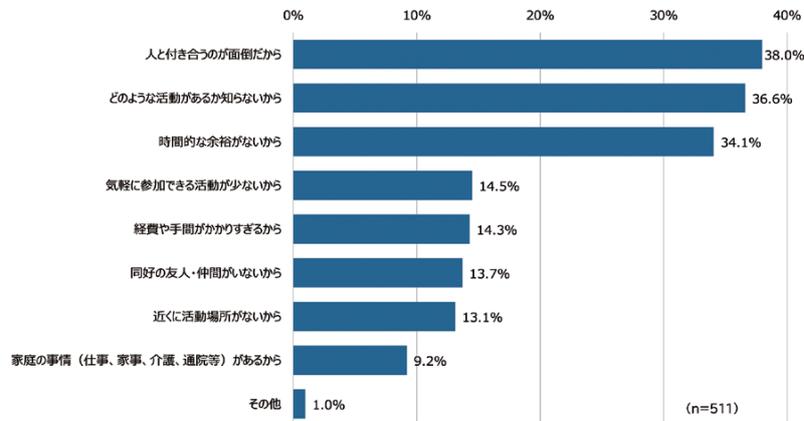
- ・ 若者のまちづくり参画に関わる部門は「企画部門」、「子ども・子育て部門」が多いが、そのほかの多くの部門も関係している。
- ・ 取組後は、予算や人的資源の制約、継続性や成果の見通しが課題となっている。
- ・ 「若者によるまちづくりの場への継続的な関与」や「若者が地域の課題や政策に関心を持つ」などは、当初期待していた成果とのギャップが大きい（下グラフ参照）。



### □若者アンケート調査から分かったこと

- ・ 4割強の若者は、まちづくりへの参画に対する関心を持っている一方、実際にまちづくりに関わったことがあるのはそのうちの半数程度である。
- ・ 自分の住む地域・自治体で活動に参加したいと思う割合は8割弱と最多だったが、通勤・通学先の地域・自治体も4割を占める。

- ・ 関心はあるが活動に参加していない層は、参加することへの負担感、参加し続けられないこと、自分に何ができるかわからないことなどを不安に感じている。
- ・ 活動に参加している理由は、人とのつながりを増やせる、社会貢献できる、楽しいと回答した割合が多い。
- ・ 関心がない層は、人と付き合うのが面倒、どのような活動があるか知らない、時間的な余裕がない、という理由を挙げている（下グラフ参照）。
- ・ まちづくりの活動について、具体的なイメージを持っていない若者が多い傾向が見られる。



#### □2種のアンケートから分かったこと

- ・ 地域振興は、自治体が若者の参画を期待する分野であり、若者の関心も比較的高い。
- ・ 公式ホームページは、自治体がまちづくりの情報を発信する際に最も利用されており、若者にとっても情報収集の主要な媒体である。
- ・ 若者を対象にした委員会・審議会は、自治体が比較的用いることの多い意見聴取の手法である一方、若者の参加意向は最も低い。
- ・ 自治体は、若者の意見反映の手法として活動成果の可視化や表彰を最も用いているが、若者の関心は低い。

## 第4章 先進事例調査

- ・ 若者のまちづくり参画を進めていくために必要なポイントを明らかにすることを目的として、参考となる先進事例候補を既存情報等から抽出し、取組熟度や若者の主体性等に着目して調査対象を選定、ヒアリング調査を実施した（下表5事例を選定）。

取組名	対象地域
①タテシナソン	長野県立科町
②新城市若者議会	愛知県新城市
③多摩市若者会議	東京都多摩市
④つばめ若者会議	新潟県燕市
⑤Z世代課の取組	福岡県北九州市

#### 【ポイント】

##### (1) 自治体として重要な考え方・スタンス

- 若者の思いを起点とし、自治体が結論を先取りしない姿勢
- 否定しない、失敗を許容する安全な場の設計
- 自治体は主役にならず、後方支援に徹する
- 若者の実情も踏まえた関わり方の許容

##### (2) 若者のまちづくり参画を促すポイント

- パートナーとしての位置づけ（ともにつくりあげる存在）
- 入り口のハードルを下げる工夫（面白そう、楽しそうと感じる入り口）
- 形や成果が見える設計（自分たちのアイデアが形になる経験）
- メンター・支援者の存在（若者の活動を支える立場の存在）
- 若者に合ったコミュニケーション手法（若者が日常的に使用するツールの活用、伝える工夫）

### (3) 取組の継続性を担保する工夫

- 制度・計画への位置づけ（首長や担当者が変わっても継続しやすい仕組み）
- 運営主体の柔軟な移行（民間との効果的な連携等）
- 世代循環を意識した設計（若者との関係性を途切れさせない仕組み）

### (4) 事業における成果の考え方

- 成果を多層的に捉える視点（短期的・定量的なものに限定しない）  
→若者のアイデアが実装・事業化されたこと、若者自身の成長、庁内組織の意識変化等
- 成果を追いすぎないという選択  
→成果を過度に求めないことが、結果として参加の質や継続性を高める

## 第5章 有識者ヒアリング調査

- ・若者のまちづくり参画を進めていく上で、留意点や効果的に進めていくポイント等を明らかにすることを目的として有識者ヒアリングを実施した（対象者は下表のとおり）。

東京都立大学法学部教授 大杉 寛 氏
真岡市複合交流拠点施設 monaca 地域交流センター 林 大輔 氏
地方自治研究者・政策起業家・元相模女子大学教授 松下 啓一 氏
慶應義塾大学 SFC 研究所上席所員 木村 紀彦 氏

### 【自治体の心構え】

- 若者のまちづくり政策は長期戦（短期的成果にとらわれず、成長を見守る姿勢が必要）
- 自治体は後方支援に徹せよ（参加機会の確保などを通じて自由な活動を支える）
- 若者を都合よく使うな（対等な立場で尊重し、若者の意見に責任を持つ姿勢が不可欠）
- 結果よりもプロセスが重要（試行錯誤や挑戦の過程を重視し、経験を通じて若者の主体性や信頼関係を育むこと）

### 【若者参画をうまく進めるコツ】

- 「面白そう・楽しそう」と「柔軟さ」が大切（入り口は楽しく、多様で無理のない参加の許容）
- 若者との接し方（対等な仲間として接し、失敗も含め伴走する姿勢が安心感と挑戦を生む）
- 成果の捉え方を変える（若者や地域の変化・成長、関係性の深化といった質的成果を重視）
- 職員も若者と一緒に楽しむ（職員もともに楽しむことで信頼関係の深化、活動の自走化へ）
- 人事異動を想定した仕組みづくり（異動を前提に目的や経緯を共有し、裏方支援に徹する）
- SNS と広報の使いかたを工夫する（若者になじむ SNS や口コミを重視し、発信方法を工夫）
- 若者が少ない地域での考え方（関係人口やリターン人材を活かした関与の仕組みづくり）

## 第6章 多摩・島しょ地域自治体におけるまちづくりへの若者参画のための取組に関する提言

### 【調査研究から得られたこと】

#### (1) 若者のまちづくり参画の意義や期待される効果等

①地域社会にとっての意義や効果等 ・地域の大人に刺激や気づきを与え、「自分たちもやらねば」という前向きな姿勢や行動変容を促す力がある。 ・持続可能なまちづくりには、多世代が交流し循環する仕組みが必要であり、若者はそのハブとなり得る。	②若者にとっての意義や効果等 ・社会的な視点を身につけていくプロセスであり、主権者教育として重要。 ・地域の役に立つという達成感によって、自己肯定感の高まり、アイデンティティの形成に寄与するとともに、活動を通してコミュニケーション能力が育まれる。 ・まちづくり活動を通して地域に対する愛着・誇りが芽生える。	③自治体にとっての意義や効果等 ・若者の提案や発想は自治体における固定概念を揺さぶり、庁内の意識を変える力を持つ。 ・メンターとして若手職員が関わることは、若手職員にとっても良い刺激、育成の場となる。 ・自治体が若者と一緒にまちづくりを推進しているという姿勢は、まちとしての対外的な知名度向上やシティセールスとして効果的である。
--	--	---

(2) 若者のまちづくり参画における現状・課題	
①自治体の現状・課題 <ul style="list-style-type: none"> <li>・若者のまちづくり参画について、成果の定義が曖昧である。</li> <li>・予算や人的資源の制約、継続性、成果の見通し等が重要視される一方、若者の主体性の担保とのバランスが難しい。</li> <li>・若者のニーズや意向に合った十分な情報発信ができていない状況。</li> </ul>	②若者の現状・課題 <ul style="list-style-type: none"> <li>・まちづくり活動へのイメージ不足や、参加による負担感への不安が、若者の参画を妨げる原因となっている。</li> <li>・若者は地域や大人との接点が乏しいことから、これら2つへの心理的距離を感じている。</li> </ul>

### 【提言】

<b>1. 基本理念・目的の明確化</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「なぜ若者の声をまちづくりに取り入れるのか」を明確化し、組織全体で共有する</li> <li>・若者を「うまく使おう」とすることは避ける</li> <li>・若者の「意見を聞く」ことよりも「ともに考える」ことに考え方を变える</li> </ul>
<b>2. 実践における基本原則</b> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 若者の主体性を引き出す場づくり           <ul style="list-style-type: none"> <li>・若者が居心地のよい環境を整える必要がある</li> <li>・「失敗してもいいんだ」と思ってくれる雰囲気づくりが必要</li> </ul> </li> <li>(2) 若者との関係性・自治体やサポートする大人の関わり方           <ul style="list-style-type: none"> <li>・自治体は若者の後方支援に徹すべき</li> <li>・担当者は「公務員」ではなく「一個人」として若者と関わる</li> <li>・若者の意見を否定せず、話を聞き、寄り添って一緒に考える</li> </ul> </li> </ol>
<b>3. 参加の柔軟性</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・参加の入り口として「面白そう、楽しそう」と思ってもらえる仕掛け</li> <li>・無理なく柔軟に関われることを許容するルールや場づくり</li> </ul>
<b>4. ターゲットとする若者像</b> <p>制度設計にあたっては、その目的に応じて異なる戦略を取る必要がある</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) すそ野拡大型（潜在的な関心層を掘り起こす）</li> <li>(2) コア参画型（まちづくりへの高い関心を持つ若者へ働きかける）</li> </ol>
<b>5. 「完璧を目指さず、小さく始める」取組の進め方</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・最初から完璧を求めない。失敗は仮説検証のプロセスとして捉えることができる</li> <li>・若者の意見や提案を小規模でも形にすることが、次の挑戦を支える原動力となる</li> </ul>
<b>6. 自治体の役割と実行基盤</b> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 庁内の体制・役割分担           <ul style="list-style-type: none"> <li>・取組の目的を言語化し、関係部署間で共有する</li> </ul> </li> <li>(2) 自治体を持つ固有の強み・資源活用           <ul style="list-style-type: none"> <li>・自治体には情報発信力があるが、媒体と活用方法は工夫が必要</li> <li>・公共空間の管理をする立場であり、活動の場を提供することができる</li> <li>・地域の団体や企業などの資源を把握しており、若者と地域をつなぐ役割が可能</li> </ul> </li> </ol>
<b>7. 評価・成果の考え方</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・若者の主体性が育っているか、市民サービスが向上したかの視点で評価ができる</li> </ul>
<b>8. 持続・発展・外部連携</b> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 人事異動を踏まえた取組の継続           <ul style="list-style-type: none"> <li>・人事異動に備え、事例やストーリーで活動を共有する仕組みを構築</li> <li>・民間に運営を移行する場合でも、自治体もパートナー的にともに活動を推進する</li> </ul> </li> <li>(2) 地域外の若者に向けた取組           <ul style="list-style-type: none"> <li>・取組目的によっては地域外の若者も対象になり得る</li> <li>・若者を地域へ呼び込む形と、地域の外から参加してもらう形が考えられる</li> </ul> </li> </ol>